

神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。

ヨハネによる福音書 3 章 16 節

学院長 嶋 田 順 好

クリスマスの 4 週間前の主日（日曜日）からアドヴェント（待降節）が始まります。もともとはアドヴェント第一主日からクリスマス・ツリーやリースなどの飾りつけを始めるのがならわしでした。この季節は自然の移ろいのなかでも最も日が短くなります。鶴瓶落としのように日が沈むとはよく言ったもので、さっきまで美しく朱に染まっていた雲が、あっと言う間に夜の帳に覆われるのもこの季節の特徴です。その分、夜の闇も一層深く感じられ、蝋燭のちろちろとしたぬくもりのある光がとてもよく映える季節と言えるのではないのでしょうか。

礼拝堂では克蘭ツに立てられた 4 本の蝋燭に、主日毎に一本、一本、順番に蝋燭の火が灯されていきます。讃美歌 21 の 242 番「主を待ち望むアドヴェント、最初の蝋燭灯そう。主が道を備えられた。この時を守ろう。主の民よ、喜べ。主は近い」は、まさにその様子を歌った讃美歌です。もちろん、この蝋燭の光は、世の闇を照らすために到来した御子イエスを象徴的に指し示しています。

前にも記したことがあると思いますが、英語の *adventure* という言葉と、アドヴェントは共に密接に関連する親戚同士の言葉です。この言葉の語源を辿ると、ラテン語で「来る」という意味を持つ *venire* に、「・・・方へ」という意味を持つ前置詞 *ad* が合わさってできた言葉であることがわかります。したがってこの語には、予期せぬ形で到来して来るものを受けとめ、その到来するものに身を賭していくという生き方が含まれていると言えるでしょう。つまりアドヴェントとは、ベツレヘムの荒野の羊飼いや東方の占星術の博士たちが、飼い葉桶に眠る家畜小屋の御子イエスを目指して歩みを進めたように、日常の様々な関心事を脇へ置いて、主イエス御降誕の喜びと希望に向かって身を翻し、歩いていく日々を過ごすという意味がこめられているのです。

まさにそのことを体現したのがクリスマス・ページェントです。こども園でも、中高でも園児や生徒たちが、母マリア、父ヨセフ、羊飼いや東方の占星術の学者たち、そして羊そのものに扮して、降誕劇の練習を始めます。最近では日本でも普及してきましたが、ドイツの家庭ではひめくりのアドヴェント・カレンダーが飾られ、「もういくつ寝るとクリスマス」とばかりに子どもたちが、いまかいまかとクリスマスの到来を待ち望みます。イヴの晩には礼拝を守り、家族と食卓を囲み、ゲームに興じます。そしてクリスマスの朝、目覚めるとベッドの傍らに置かれていたサンタクロースからのプレゼント。

どなたの記憶のなかにも幼児の頃の懐かしいぬくもりに満ちたクリスマスの光景が宿っていることでしょう。クリスマスにはキリスト教 2000 年の様々な文化、芸術、風物が密接に絡み合っています。とりわけ、その多くが生き生きと豊かに詰まっているのが 12 月 16 日に持たれる 5 回目を迎えた宮城学院のクリスマス・マーケットと言えるでしょう。ですから「宮城学院にはあります。あなただけの、ほんもののクリスマス」と謳っているのです。

それにしてもこの場合の「ほんもの」とは何を指しているのでしょうか。そこで私たちが心に留めたいことは、クリスマスの真実の意味を明らかにしたヨハネによる福音書 3 章 16 節の御言葉です。

「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が、一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。」

クリスマスこそは、神様から私たちへの最高の愛のプレゼント、御子イエス・キリストのご降誕をお祝いする日にほかなりません。

宮城学院のクリスマス行事は、すべからくその喜びの礼拝で始まります。ともすれば自分ファーストの幸せだけを追い求めがちな私たちが、独り子をお与えくださったほどに私たちを愛してくださった神様の愛にならい、園児、生徒、学生はもちろんのこと、同僚や家族や隣人との絆を深め、赦し合い、分かち合い、共に歩む思いをより確かなものとされる時として、このクリスマスを過ごせれば、それにまさる喜びはありません。